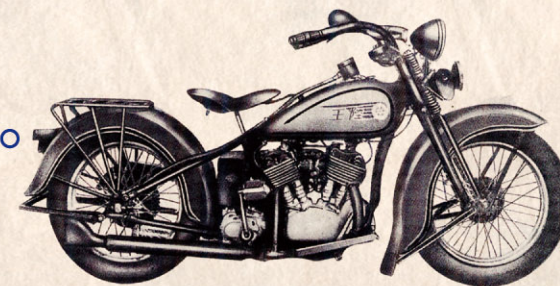
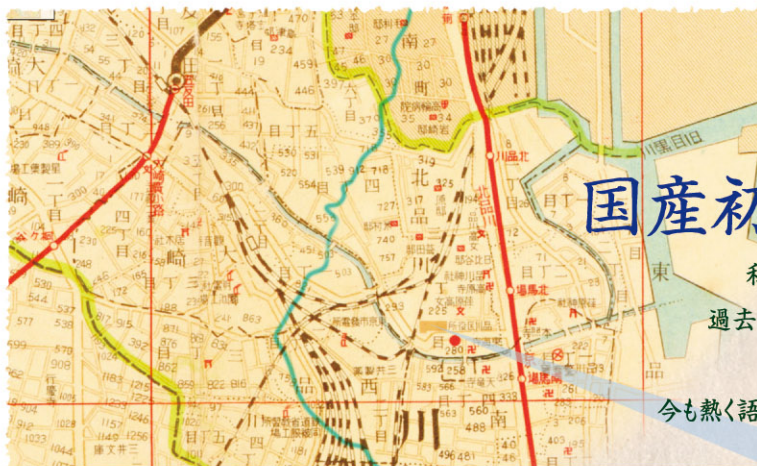


国産初の大型オートバイ“伝説の陸王”は、この地から。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかになればと願い、一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第四話は、今も熱く語り継がれる伝説のオートバイ『陸王』が大崎(北品川)で造られた話。ものづくりの地が育んだその歴史を訪ねます。



昭和12年、陸王内燃機品川工場製の「陸王」



明治初期には品川硝子製造所を、さらに昭和初期には陸王を生んだ北品川エリアは、目黒川の水利を活用して広がった製造工場の集積により、日本の近代工業化を牽引しています。(写真は目黒川から望む第一三共物流センター周辺)



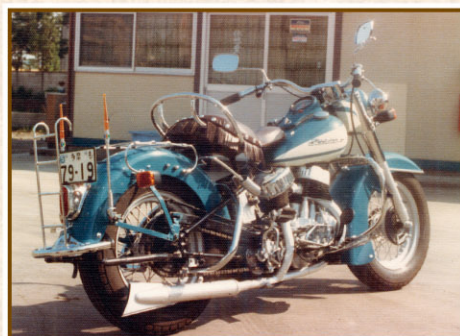
日本初の洋式ガラス工場「品川硝子製造所」(※写真建物)。



かつて陸王内燃機(株)が存在した跡地(写真)は品川学園の敷地となり、一世を風靡した陸王誕生の地の面影はありません。写真は山手通りから見た品川学園。



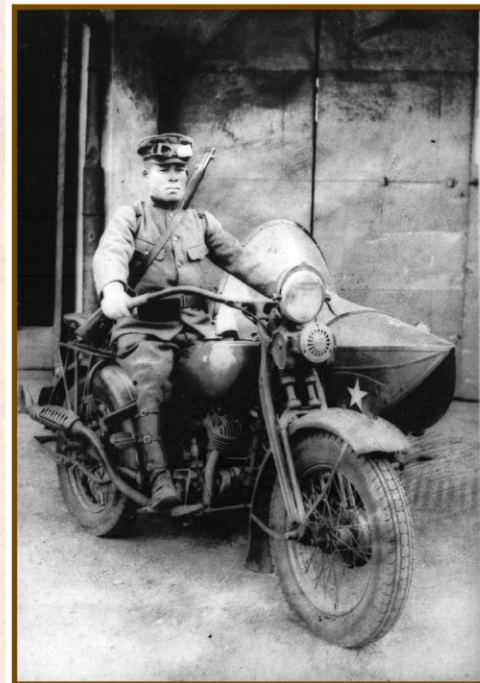
「陸王内燃機」誕生以前の昭和9年、既にハーレーダビッドソンのライセンス生産を行っていた「日本ハーレーダビッドソンモーターサイクル」品川工場



陸王モーターサイクル(株)製として昭和35年まで製造された“戦後の陸王”。戦前の製造開始当時の車種と殆ど変わらないスタイルや操縦機能は、まさに陸王ならではのもの。この容姿を愛するライダーは今も全国に。



戦時中の昭和10年代末期、陸王内燃機・品川工場に並ぶ陸王。昭和25年には昭和飛行機(株)と三共(株)の共同出資により「陸王モーターサイクル(株)」として再スタートするも、時代のニーズに呼応できず昭和35年に製造中止へ。



軍用オートバイとして使用された97式陸王にまたがった陸軍兵士。大陸の荒野を駆けめぐるサイドカー付きの巨大な車体は、“鉄馬”とも称され、その勇姿と共に陸王の名を世に知らしめています。

昭和10年、米国製大型オートバイ「ハーレーダビッドソン」の国産化により誕生した『陸王』。その巨大な車体と馬力を持つ「鉄の馬」は、戦前から戦後への一時代を疾走。目黒川畔に広がる「ものづくりの地」に新たな歴史の足跡を加えたのでした。

重厚長大な歴史的大型オートバイ。現代へ伝説とロマンを伝えた「陸王」。

バイクライターならその名を知らぬものはいない伝説的存在の大型オートバイ、陸王。かつて軍用車として使われていた側車付きのタイプを例にとれば、最大排気量1300cc、総重量500kg、さらに全長は2.6mほど。軽自動車よりひとまわりも大きい、まさに巨大な「鉄の馬」と称されたほどの重厚長大、頑強な大型オートバイでした。昭和35年に製造を終え、今では数百台ほどしか現存していないとされるいっぽうで、その歴史遺産の価値を持つ陸王の愛好家は数知れず、ドンドン、ドンドンと地鳴りのように響くエンジン音や手作り感覚のメカニズムは、荒馬のように扱いづらくも愛すべき存在として現代に語り継がれたのでした。

大陸を駆け抜けた「鉄馬」。日本陸軍の軍用バイクとして一世を風靡。

陸王は昭和10年、製菓企業の三共(現在の第一三共)の系列会社「三共内燃機」の手により米国ハーレーダビッドソンの国産化を通じて誕生しました。後に「陸王内燃機」と社名を変えたその製造工場(品川工場)からは年間数千台のオートバイが生み出され、やがて昭和12年には日本陸軍の軍用車として大量生産され大陸を駆け回っていきます。大出力でタフな環境に強いその実力を遺憾なく発揮した、陸王全盛の時代でもありました。

ガラス製造に始まった目黒川畔「ものづくり先駆地」の歴史に、新たに加えた陸王の足跡。明治6年に川の水利活用を目的に築かれたガラス製造工場の隣接地に、さらにバイク製造工場を後に生み出した目黒川畔、北品川3丁目。京浜工業地帯を形成するものづくり産業発祥エリアとしてのその歴史に、陸王は伝説の二輪車誕生の地としての新たなストーリーを加えたのでした。戦後15年後に製造を終えるまでこの地と共にあったその生涯は、大崎に散りばめられたキラ星の史実の一つとして今も輝き続けています。



小誌発行元の(社)大崎エリアマネージメント事務局長、吉澤中氏も熱的な陸王愛好家の一人。写真は昭和の頃の愛車とのツーショット。



小誌前号(夏号)で紹介した“日本初の洋式ガラス製造工場”が誕生した地とほぼ同一の“三共エリア”にあった北品川3丁目の陸王内燃機・品川工場所在地。その後、三共(株)の寮から現在は小中一貫校の品川学園のグラウンドへとその姿を変えています。